

歌集 ふりかえる

秋村明彦

日本近代文学研究者（外村彰^{とのむら}）の顔を持つ作者の、
約二十年にわたる短歌創作から精選された歌集。

個人の内面に映発する浪漫的風景を叙した

「おりふしの内映を」、

また昔日ながら「あはするものたちを」、

リアリズムを旨として曲折を経た人生を

通時的に回顧する「日々感慨を」、

それぞれ「ふりかえる」歌々が総計一〇六五首。

伝統的な定型は遵守しながらも、

多岐にわたったイメージが明滅し、

読者はおのずと自らの生活感情と呼応する

感受性を見出すだろう。

約束のこわれし先に空青く誰にも会わぬ階^{きざはし}を踏む



刊行のことば

「秋村明彦」は、日本近代文学研究者・外村彰が歌誌『ポトナム』に執筆をする際に用いている筆名である。岡本かの子や室生犀星の文学を主に研究しており、単著七、編著二十六、共編著十二、共著四十二と、関わった書籍は都合八十七冊にのぼる。元高校教諭で、三十歳から大学院に進んだ変わり種だが、かねて詩歌の創作に思いを寄せ、四十歳から約二十年にわたってほぼ毎月、ポトナム短歌会の準同人として発表をつづけ、今日に至っている。このたび縁あって、還暦の記念に三人社より歌集刊行が実現するに至った次第。

歌集のタイトル「ふりかえる」は、人生の有為転変を振り返り、わが道程を反省しておきたいとの作者の意向により題されたもの。おもに『ポトナム』の歌稿から一〇六五首が編まれた。――前半は、おりふしに内映して来た心象風景を詠じた短歌をまとめてあり、浪漫的資質を明らかに示す諸作がちらりばめられている。後半には、家族縁者との愛別離苦や幾度かの旅行等を材に、日々の感慨のうつろいをリアリズム調で綴る「うた日記」然とした歌々がならべてられている。

約束のこわれし先に空青く誰にも会わぬ階を踏む

古書つつむ破れバラフィン紙の鉛色の皺伸し眺む旧主の指紋

渋滞のフロントガラスのそれぞれに歪みうつりて電線のびゆく

赤テープ目印とする樹をつたいいざなう君の手首そと引く

いまもまだ信じて生きておられるかそうわれに問いかくわれに問う

木下闇洩れ来る風に青葉ゆれ零れし光りここで遊ぼう

あくがれて胸の鉦よりわが魂ゆ響きてわたる宇宙のたまゆら

ありがとうございます いなくなります。わたしたち 覚えておいても いただけますかな

生地の顔よそおいし我が第一声 朝の春愁教壇に呑む

わが庭にしゃがみ塵とる姉妹その小さき背よりしろき息たつ

健さんの映画のラスト嗚咽せし父のとなりで娘の腹鳴る

亡き母に線香そなえ手を合わす中学の娘の背まるまりて

蒼白き雲の夢路をいとけなき姉妹の往くを父みまもりて

ポトナム叢書 第五四一篇

歌集ふりかえる

●著者 秋村明彦

●体裁 四六判・並製・224頁

●定価 本体1,500円＋税

ISBN978-4-86691-774-0
●刊行 2024年8月

●著者紹介

秋村明彦（あきむらあきひこ）

一九六四年滋賀県生まれ。

本名・外村彰（とのむらあきら）。広島市在住。

安田女子大学文学部日本文学専攻教授。ポトナム短歌会会員。

著書に『念ふ鳥 詩人高祖保』

『岡本かの子短歌と小説―自我と没我と―』

『犀星文学 女ひとの形象』

『多喜さん漫筆 詩人井上多喜三郎のこと』

ほか。

編著に『第三次「椎の木」復刻版』全十一巻

別冊一（三人社）ほか。

三人社からの近刊書に『短歌研究 復刻版』

全百四十二冊・別冊一（監修）がある。

●関連図書

1932年10月～1944年7月

改造社発行

短歌研究 復刻版

全142冊・別冊1（全11回配本）

戦前期を代表する短歌総合誌

実作だけではなく、和歌や万葉集などの
古典研究にも力を注いだ本誌は、随筆や
評論、紀行文を配すなど多くの特集を組
み、短歌界の中心的役割を果たした。

監修 外村 彰

別冊 解題・総目次・執筆者索引

体裁 A5判・並製・総約31,080頁

揃定価 470,600円＋税

推薦 中西健治・田中 綾

●表示はすべて税別

三人社

〒606-8351

京都市左京区岡崎徳成町29-3 岡崎ミントビル

電話 075-762-0368 FAX 075-762-0369

E-mail:office@3nin.jp https://3nin.jp/

ご注文は書店様または直接上記までお申し込みください。